公開講演

漢語仏典について

牧田諦亮

只今、ご紹介たまわりました牧田でございます。こういうところ、ことに、公開講演のような肩の凝るようなものは好むものではありませんが、硬くではなく、なるべく軟かにお話しいたします。

こゝに漢語仏典と申しますが、中国はご承知のように普通中国語、中国語と申しますけれど本来中国には五十何種類かの少数民族がありまして、それ〴〵がその民族の言葉をもっているわけで、従って漢語をもって中国語とはどうも、という意見があるようでございまして、中国の方から出ますそうした関係の本などはほとんど漢語ということばを使っております。これは仏典の場合はいうまでもなく、そうした漢語仏典（漢訳仏典と漢民族撰述の仏典）が中心となっております。ところがそれじゃ漢語に訳された仏典、翻訳された仏教、そうしたものが果してどの程度の確実さをもって翻訳と言えるかとなりますと、それは非常に問題が多うございます。私は、ご紹介いたゞきましたように、昭和二十年終戦まで、上海の東亜同文書院大学におりまして、助手をしておりまして、中国近世仏教史の勉強をしておりました。そしてたま〳〵昭和十八年秋に兵隊に召集されまして、昭和二十年八月十五日に上海南方の嘉興というところで終戦となりました。そして三日後、八月十八日に現地召集解除になって、同日夜上海の大学に戻りましたけれど、大学はすでに封鎖されておりまして行くところがありません。そこで同じ大学の教授（後に東京教育大学教授）であられました小竹文夫先生のお宅へ飛びこんで泊めていただくことになりました。そこには先客がおりまして、武田泰淳という小説家の、その頃卵だった彼と、小竹先生の指導で約半年、二十二史劄記・史記列伝などを読みつゞけました。その後武田さんは小説の上で大きな活動をなしとげいろんな著作を書きました。私は翌年昭和二十一年の三月二十一日まで上海に居りました。普通戦後、集中営といっ

て一ヶ所に日本人を強制的に集中居住させるのですが、上海の場合は他の地方とちがって非常に日本人居住者が多い、従って一ヶ所におしこめておくというようなことで済むことではない。二、三十万とおったわけですから。それで古くから日本人が多く住んでおりました虹口という地域を、日本人の集中収容場所としたものです。そこできわめてノンビリとした半年間を送ったわけでございます。

終戦後ひと月ふた月と経ちますと、ボツ〳〵と上海の空気が変わって参りました。東亜同文書院大学自身はもちろんすぐに接収されまして、九月の下旬にはその接収官として、『中国俗文学史』などの本を書きました鄭振鐸が、國民政府の教育部の上海の担当者として来まして、東亜同文書院大学図書館の蔵書二十何万冊その他一切の財産とか全部接収いたしました。そのついでに、私たち教職員の本もみな接収されてしまいました。私自身も三千冊ほどありました蔵書をみな持っていかれたわけです（その蔵書の一部を、陝西師範大学の教授が上海復旦大学の学生であった時に、古書肆で買い求め、四十年後、その教授のもとに一年研究に従事した富山大学の教授の報告で知りました）。

そうした中でだんだんと上海が国民党関係の政府役人、国民党の軍人、そうした人たちが沢山入ってきて上海が変わってきました。そうしたときにたとえば高級将校が来ますと、招待会などがございます。鶏の尾の酒の会（鶏尾酒会）という字が新聞にどん〳〵と出てくるわけです、これはまことに面白いですね。鶏はクックで、尾はテール、クックテールパーティ、つまりカクテルパーティのことを、いつも上海の新聞では、「鶏尾酒会」、つまり鶏の尾の酒の会という。若干皮肉の意をもふくめたそのことばはいかにも中国の翻訳ということですね。それを日本人ですと、外国のものは全部発音どおりにカタカナで済ませてしまいますけど、中国人の方ではカタカナにあたるものがございませんから、なんでもかんでも漢字に置きかえなければならない。そうした場合その翻訳の仕方に、これはまあ確かにカクテルパーティですから、ひとつの音をそのまま写しているものでございます。「迷您」と申しますことは、ミニスカートのことですね。小さい短かいスカートだということです、そういうものを「迷您」で、これは確かに音は「みんにん」ですが、ところが字をみますと、あなたを迷わすスカートだということで、こういうことにはなってます。たしかに男性にとってあのミニスカートの女性を見ますと、いささか悩ませることがあるということを、中国人はちゃんと「迷您」ということばで置き替えている。

こういうことばで、おそらくは中国の最初の仏典の翻訳というようなものもつまり音で訳するか、完全に意味を訳する

か、そういう違いがあるわけです。

「真言」の方で、陀羅尼というのは、五種不翻というその翻訳の仕方の中で、この真言というものは、音訳してもどうにも意味で訳することができない、だから仕方なく音で、その音で出たものは全く我々の想像もつかないですね。曹洞宗の方は如何ですか、浄土宗で使っているあの夏のお盆の施餓鬼のときなんかは、おそらく江戸時代に曹洞宗から来たんではないかと思いますが、「ノーマクサラバ　タタギャター…」というのですが、これは一体何の意味か残念ながらまだ分らない。このあいだも京都の種智院大学で日本密教学会がありましたとき、光明真言の翻訳の話しが出ておりました。光明真言というのは、真言宗では一番大事な真言だと言われているのですけれども、その日本語訳というものが、まだ定訳がないそうです。あの人の訳はこうだ、この人の訳はこうだ、私のはこう思うというような四種類か五種類の訳を並べ、光明真言の説明をしておられましたけれど、そういうふうに翻訳することのできない真言、そういうものもやはり中国の仏典の中にはございますが、この仏典の翻訳というものがおそらくこういうような形でいろいろなことばが行なわれたのではないか、そしてその翻訳のときには、当然に、いろ〳〵な中国の思想語彙、中国の社会事象、そうしたものを含めたことばがあり、お経の中につかわれております。

私の友人で道教のことを専門にやっておりますある教授が道教に凝りまして、阿弥陀経、あるいは浄土三部経の中にその道教的ことばがどれだけあるかということを並べたてまして、ここに全部で何十カ所あるといいまして、その中のことばに、たとえば道人、道教、こういうことばは浄土三部経の中にございます。じゃあ道教・道のおしえ、いわゆる道教と同じではないかと、こういうことを言い出すわけでございますが、お経の中に使われている「道教」ということばは、いわゆる中国の古典的道教ではなくして、人間が守るべき道、おしえ、そういうかたちで道教という文字が使われている。また道人というのは、普通の道人・道士と申しますと、道教を信仰している人たち、あるいは道教の坊さん、そういう者を「道人」と申しますけれども、経典の中に使われているものは、同じく道をおさめる人、仏の道をおさめる人というようなかたちで、この道人という言葉が漢語仏典の中でつかわれています。考えてみますと、このいわゆる「漢語仏典」というものの中には、いろ〳〵考えさせられるものが多いわけです。そのころの人文科学研究所では、「共同研究」と「個人研究」の二本だてになっていました。共同研究では、三十余年の成果を『弘明集研究』三巻として、昭和五十年三月に完成しました。先ほどもご紹介いただきました『疑経研究』という本を京都大学を定年、退官の昭和五十一年三月に、今

までの「個人研究」をまとめて出版いたしました。この疑経ということばは、これは漢語に翻訳したものが正統の経典である、漢民族がつくったお経は、翻訳したお経でないからにせものであるという考え方です。漢民族の経典目録編纂者たちは、その考え方にたって、漢民族がつくったお経は全部疑偽にぞくするものだとして、これを「疑経」として「真経」という翻訳されたものと別に扱うということが行われております。これはその経典目録編纂者、これは漢訳仏典最初の経録『綜理衆経目録』編纂者道安とか、あるいは『出三蔵記集』を編纂いたしました僧祐とか、あるいはその他大蔵経の中心的な経典目録として今日もつかわれています唐の智昇の『開元釈教録』、のような経典目録の編纂者は、いつも漢族がつくったお経はダメだ、翻訳したものでないと経典でない、ほんとの仏の経典でないというふうに言っているわけです。果してそれでは翻訳された経典が正しいかどうか。ほんとに翻訳されたかどうか、こういうような多くの問題点があるけれども、なか〳〵それは簡単には見きわめられないということでございます。

駒沢大学に戦前、林屋友次郎という先生がおいでになられました。林屋友次郎先生は『経録研究』という大部な、大変大きな本をお書きになりました。そしてそれは上・下の予定が、上巻が出て、下巻はとう〳〵先生のご存命中にはそれは出版されていなかったようです。この経録の研究というものは、じつは林屋友次郎先生も最後はおそらくもう戸惑いされたのではないかとわたしは思うんです。つまり経録の研究と申しまして、こうして『出三蔵記集』あるいは『開元釈教録』などの多くの経録がでているけれど、その中で、この経はニセモノこの経はホンモノという査定がしてあるのかどうか、こういう問題がつまり中国の方では漢民族の考え方として、これは中国人というのは「中華意識」でも知られるように自己意識が高い民族でございます。

丁度数日前に、わたしの研究室で研究した外人のひとりで、今ベルギーのルーバン大学の日本部主任をしております教授が来まして、中国ほどかたくなに自分の意志を言いたてる民族は他にあまりありません、というような話しをしておりましたが、これはご承知のように漢民族には昔から中華意識というものがございまして「東夷西戎南蛮北狄」といいまして、東の方は夷、西の方は戎、南の方は蛮、北の方は狄といいまして、自分の住んでいるところは一番まん中で中華であり文化がすぐれており、周辺はみんな文化が低く、野蛮人という考え方、これが中華意識でございますが、この中華意識というものが非常にきつい民族、そして自分の国が一番文化がすぐれていると自慢しているにもかかわらず、こうして外国からいろんな新しい文物、あるいは新しい宗教が来る、

これはそこでは非常な問題が生ずるわけでございます。

さきほどお話しに出しました『弘明集研究』という本をわたしたちは塚本善隆先生が責任者となって弘明集の会読を始められた昭和二十四年以来、二十余年かかりまして、人文科学研究所で毎週水曜日に午后の一時から六時、七時頃までかかって、インド、中国仏教、中国哲学の専門研究者老若ふくめて二十数人ほどの人たちが集まりまして、担当者のつくった原訳をたゝき台にして読む、そしてそれは議論し読むだけであって、未定稿であったものを、わたしは定年前の三年ほどかかって寝食を忘れるということがございますが、寝食を忘れたらば体がもちませんが、非常に努力して三冊の上・中・下の『弘明集研究』をまとめあげたわけでございます。

その『弘明集研究』の一番最初に「理惑論」というのがございます、もとは「治惑論」という名前であったのでございますが、これは唐の第三番目の皇帝高宗の諱が「治」であるためにその諱を避けて「理」惑論として入っていますが、この中には仏教がインドから西域を通って中国に入って来た。その中国へ、非常に自信の強い儒教の盛んな中国へ入って来て、そしてそれが漢民族の中に受け止められるまでには、いろんな困難なことがありました。まず第一番に、僧侶が頭を剃っていることは、儒教の方から申しますと、親からもらったこの身体を大切にしない、親不孝の第一番だ、とする非難でありました。つまり親からもらった髪の毛を大事にして残して、そして最後まで身体をたもっていく、これは親孝行の「身体髪膚、これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始なり」(孝経)といっております。そして人生の最後、臨終のときにいたっても、自分の身体を弟子たちに見せて、「予が足を啓け、予が手を啓け」(論語・泰伯)というて、自分の手足が、親からもろうたようにじっと保ってきたかどうか、そして親からもろうた身体のように立派に揃って、そして死んでいく、それが孝の終りなりといわれている。一番孝の終りなりということは、日本仏教の方からいうとあまり関係ないのですが、名をあげ、そしておおいに立身出世して親の名前をあげる、それが孝のおわりなり(孝経)と、こういうことなんです。立身出世して親の名前をあげる、それが孝のおわりなりと、こういうかたちのですね、儒教の考え方からいえば、仏教の、いろ〳〵なすべてのものは縁に因ってなるとか、すべてのものは無常であるとか、そういうようなことは、儒教の方からいえば、これはまことにけしからん考えだ、ということでいろ〳〵な困難なことがありました。そういうようないろ〳〵な困難を経てたま〳〵漢語に翻訳された経典というものは、『梁高僧伝』で申しますと、最初に翻訳されましたのは、「四十二章経」だということになっておりますが、これは理惑論を承けたひとつの伝承であって、はたしてどの経

典が最初に翻訳されたかはわかりません。

しかしその経典が翻訳された、それとほとんど時を同じくして、この「疑経」というものが生じているわけです、中国の最初に経典目録を編集した道安の『綜理衆経目録』、その中には疑経が二六部三十巻と、個々の名前をあげてそれが記録されております。もちろん道安の『綜理衆経目録』自身はすでに散逸はしておりますけれども、その内容は梁の時代にできました僧祐の『出三蔵記集』の中にそれが入っておりますから、わたしたちは道安の記録を、それによって知ることができるわけです。中国仏教の初期からそういう経典の翻訳というものが行われる、一方で、疑経というものがあり、それは、漢民族の理解する仏教を漢民族によって、その民族性を生かして、より弘く仏教を伝えたいとする努力のあらわれがありました。そしてその経典の翻訳といわれるものが、果してどの程度に行われたか（直訳か、漢民族の思惟をふくめたものか）、今日では全く知ることは不可能です。と申しますのは中国の方ではこれもやはり中華意識でしょうか、漢語に翻訳してしまうと、その原典は棄てゝ顧みない、いったん中国のものにしてしまえば、その漢字になったものが中心であって、よその国のことば、もとの国のことばはもはや不必要である。これは今の共産主義のマルクス・レーニンなどのいろ〳〵な著書は翻訳されておりますが、それは中国語に、漢語に翻訳されたものが正しいのであって、それの原典について顧みることがない。仏典の場合も今日中国ではほとんど、おそらく全くといっていいほど、そういう原典が残されておるということがないわけなのです。すべて漢語に翻訳されたその時点で、漢語の方は正しくて、もとの方はすてて顧みない。この漢民族の翻訳についての態度、そしてまた翻訳については当然に漢民族知識人の援助を得るわけです。もちろん外国から来た僧侶たちがもってきたお経というもの、経典の原典というもの、そうしたものを翻訳したものを、そうした僧侶自身も漢語に通じていたでしょうけれども、その周辺にいる漢民族の知識人、僧侶たちによって援助を受けて、経典が翻訳された。そう考えますとじつは、この経典そのものをもういちど考え直す必要がある。はたして今日、わたしたちが大蔵経の中に入っている経典が原典本来そのままであったかどうか、実際にどのようなかたちで翻訳されたかどうか、そういうことを考えてみる必要がございます。

それでわたしたちが今、やっております仕事は、名古屋の通称七寺（なゝつでら）という、真言宗智山派の長福寺でございますが、そこに一一七五年、日本で申しますと平安末期、法然上人が浄土宗を開いたといわれる、承安五年からのあと数年の間に、非常に精力的に一切経の書写が行われたことがございます。今日、七寺には一一七五年頃に書写された一切

経が現在四千九百五十四巻の経典が残されております。これはアメリカ軍の空襲のときにも幸い疎開してありましたので、戦災を免れまして、今日、お寺にそれが全部戻ってきております。そうしたものの調査をたま〳〵数年前からやるようになりました。そうしました中に『毘羅三昧経』というお経が上・下二冊完全なかたちで残されておりました。この『毘羅三昧経』というのは、じつはさきほど申しました道安の経録に、中国仏教の疑経目録の中にある二六部三十巻の疑経のなかに、この『毘羅三昧経』があるわけです。一一七五年に書写された日本の一切経の中に道安が最初に記録していた疑経が入っている。それはもちろんわたしどもの仲間で毎週金曜日に会読を続けており、ようやくこの三月に『毘羅三昧経』を中心とした七寺の『古逸経典研究叢書』第一巻（平成六年三月、大東出版社刊）というものができあがったわけでございます。

もちろんこれは漢民族がつくったお経、中国でつくりましたといいましても、それまで翻訳されていますお経、あるいは行われておりました経典類、あるいはそうしたものを参照しながら、漢民族の思惟のもとに、漢民族が読んで理解できるような経典、そういうかたちでこの『毘羅三昧経』も編集され著作されております。誰がつくったかということは分りません。けれども完全なかたちで残されている。そういうことをみますと、じつは日本では『毘羅三昧経』がなぜ七寺の一切経の中に入っていたかと申しますと、平安末期、一一七五年のころ、そのときには名古屋の熱田神宮、あるいはその付近にありましたお寺、神社、そうしたところにありましたお経をみな借りまして、写しておりました。熱田神宮にも相当な仏典があったようでございますが、そうしたものは勿論ご承知のように明治期の排仏毀釈のようなものによって、それが失くなってきているわけでございますが、そうした熱田神宮そのあたり、そしてその他に美濃あるいは尾張、その辺で求められないお経ははるばると京都まできまして、その頃は京都には藤原氏の六勝寺、六ツの勝の字をもったのがありますが、その中に法勝寺というお寺があります。この法勝寺は今日ではもちろんなくなっておりますが、今の京都の動物園のある辺りがこの法勝寺の遺蹟であったようですが、この法勝寺の一切経を借りて、それを清水寺で写したというような奥書きもあります。そういうふうにして名古屋周辺で集められないお経はこうした有名寺院からまた借りして写す。京都の法勝寺にありました『毘羅三昧経』は一体どういうものかといいますと、『大日本古文書』、正倉院文書の中に『毘羅三昧経』を写した、という記事が入っております。ということは、これは天平年間のことでございますが、この天平年間以前におそらくは朝鮮、あるいは中国から直接かこれは分り

ませんが、けれども当然海外から奈良朝にもちこまれ、それによって経典がそこでまた写されるということになる。

そうしますと結局真経だ、疑経だと経典目録の編纂者は声をからしていうておりますけれど、実際にはそういう選別なしにちゃんと日本へも入ってきてる。

七寺の方には、まだ十点ほどのいわゆる疑経類が入っておりまして、これらの研究報告は一九九四年から毎年一冊あて、一九九九年の三月に第六巻を出版して完了する予定でおりまして、その第一、二、三巻あたりに今申しました疑経類を研究の対象として、それを報告する段取りになっておりますが、そういうことを考えてみますと、実際にどういうかたちで経典が翻訳されたか、あるいはどういうかたちでいわゆる疑経といわれるものがあったか、そういうものについて非常に考えさせられるものが多いわけです（十六巻本仏名経を中心とする研究は、七寺古逸経典研究叢書第三巻として、平成七年三月に刊行）。

わたしは丁度三十年近く前ですが、永平寺の管長をしておられました秦慧玉禅師に御縁のある方のお寺へ辻政信さんに関連の事がありまして行ったことがあります。そこのお墓のあちこちに「血盆経にいわく……」とか、そういうことが書いてある塔婆を見たことがあります。じつはわたしは曹洞宗の方でも現在も使っておられるのかとはじめて気がつきました。それから後、ご存知のように『血盆経』についてはいろんな問題点がありまして、曹洞宗の中では『血盆経』は使ってはいけないことになっているそうでございますけれど、この『血盆経』は中国で行われておった経典でございます。婦人の出産のとき、あるいは赤ちゃんが死んでしまうことか、あるいは出血多量で母体が、お母さんが死んでしまうとか、そういうことを怖れて『血盆経』を読むとか、あるいはそういう不幸があったときに『血盆経』を唱えるとか、そういうことがあったようでございます。中国の方ではもちろん明代の頃のいろんな『金瓶梅』『紅桜夢』という小説の中には、度々出てまいりましてその『紅桜夢』の中に寺での法事にこの『血盆経』を読んだということが書いてございます。出産のときに、事故なんかにあいまして、出血多量で亡くなる、そういう内容や後世での使われ方が女性蔑視につながるとかいうようなことが曹洞宗では問題になったとか聞いておりますけれども、これは今日でも他の宗派でもそういうことは使っております。

わたしは滋賀県の甲賀郡の生まれでございますが、その菩提寺にですね、わたしは寺の生まれではございませんが、一方では野洲町念仏寺の住職でございますけれども、生まれ故郷の方では、あるお寺の檀家のひとりでございます。そこへ去年、たま〳〵親戚の法事がございましてお寺に行きました

ら、そこの本堂に「血盆講」という札がありました。その講に入っている人たちの名前が書いてある。これでわたしはビックリいたしまして、もちろん『血盆経』からきた血盆講でございましょうが、これは一体どういうことかと聞きました。新しくこれらの檀家へ嫁にきた人たちはみな、この仲間に入るわけで、血盆講の仲間の名前が並んでいるわけでございます。そういうような『血盆経』というようなもの、これは年代的に申しますとどうも、早くても宋の末か、元代の頃に中国でつくられた経典であるようでございます。こういうようなものも、じつはやはり仏教というものが一般民衆の中に入っていくうえには、どのようなかたちで入っていくべきかをあらわしているものといえます。この疑経というものはいかにも疑わしいとか、あるいはニンベンに為を書きました偽のお経とかいうので非常にゴロが悪いのですけれども、それは経録編纂者のいわば偏見にもとづいた意見であって、わたしどもはそうは思わないわけです。つまり翻訳された経典、あるいは漢民族がつくった経典、いづれにしてもこれはやはり、自分たちの修行のため、自分たちの日々の生活の中でひとつの精神的なおしえとなるもの、そうしたことを教えるものが、経典でございます。

おそらく曹洞宗の場合はどうかは知りませんが、浄土宗の場合ですと、法事とかそういうときに、浄土三部経を読みます。そうしますと「如是我聞一時仏在――」これは聞いてる方は全く分らない、読んでる方もですね。この頃の若い人たちなどはおそらく、そのお経の横につけてあるフリガナを拾うて読んでいるような形での経典を読誦するというような形で読むことはあっても、これは聞いている方はいよ〳〵分らないわけですね。「如是我聞一時仏在――」といわれたらですね、「これはもうお経が始まった、じゃあ一ぷくしようか」ということになりかねない。そういうような経典は、じつは日本のひとつの独特のものなのです。というのは日本ではご承知のように経典が日本に伝えられたとき、日本では、日本人は文字をもたない民族でございます。したがって伝承的にそれ以前に日本に来た渡来人の間には漢字があって、仏典も読まれていたものでしょうが、日本人にとっては、アカの他人という縁のないものであった。それがたま〳〵日本に百済の聖明王によって『千字文』とかお経とか『論語』とかがもたらされたという。そのもたらされたときには、じつは日本人は文字というものを持たない、開国伝説伝承、言い伝えは、昔から伝えられておったとしても、それを書きとめる技術を知らなかった民族であります。そしてそれがようやく百数十年ほどへて奈良時代になって初めて文字を使って日本の歴史というものを書く『古事記』となり、『日本書紀』となったものであると、これは皆さんご承知のとおりでございま

す。ところが私が必要に迫られて『日本書紀』を読みまして、欽明天皇の壬の申の年冬十月ですが、仏教の経典が初めて百済からもたらされたというところをよく読んでみますと、すぐそこに百済の聖明王の国書、公けの手紙がちゃんと書いてあるんですね、『日本書紀』の中に。ところがそれはもうすでに古くから言われていることで、皆さまご承知のとおりのことです。この国書といわれている文章、それはじつは長安で勉強した道慈が、中国から帰えってきて、あの『日本書紀』の編纂にかかわって、仏教のところをその道慈が書いた。そのときに、以前長安におりました道慈は、義浄三蔵のもとにおって、よく義浄三蔵の翻訳とかを知っておった。そして日本へ帰った道慈は『金光明最勝王経』の中の文句がそのまま『日本書紀』の百済の聖明王の国書というものの中に書かれている。ところいうことになってまいりますと、つまり日本の歴史というものはじつはそれほど信用ならんものとなってくるわけであって、これは事実そのとおりなんですね。こういうこと、これはひとつの事実の極端な例でございますけれども、そういうことを考えますと、日本人は仏典が入ってきたときにそれを日本語に、日本の文字にすることを知りませんから、当然翻訳ということはないわけでありません。そうしてようやく奈良時代になって漢字を自分の文字として使うようになっても、今度はそれをそのままおいておく、ついに日本の仏教者は経典の翻訳ということについて決定的考えをせず、あるいはまた決定的経典翻訳ということについてあまり考えず今日に至っております。一番大事な宗教行事としての経典を読誦するというときに、わけの分らん、じつは誰が聞いても分らんような日本語でもない、中国語でもない、その言葉でそれを読む。そしてこれを二十分なり三十分なり読んで、それでお経を読んだということになる。こういうことについて、ほんとうに真剣に果してこういうことでよいのであろうか。そうしたことを考えた、少なくとも宗教行政にかゝわっている各宗の宗務総長だとか教学局長だとかが考えたことがあるだろうか。そういったことを考えますと、じつは日本で経典の翻訳が行われなかったというこの事実、それはついに日本人が経典を読むということについて、真剣でなかったということにもなりますが、そういうことについていろ〳〵考えてみますと、じつは多くの問題がでてまいります。

そこでひとつの例として、お手元のプリントを見ていただきますが、これは右の方に①と書いてありますのは『大正大蔵経』の巻十七、安世高訳といわれております『分別善悪所起経』というお経の一節でございます。『分別善悪所起経』というのは、これは中国の方で翻訳されたとして、もちろんでいろ〳〵な大蔵経の中に入っており、『高麗大蔵経』にも

入っており、そしてそれにもとづいた『大正大蔵経』第十七巻に入っております。昨年秋じつはわたしは、非常勤講師をしております仏教大学大学院の学生と一緒に本を読んでおりました。『分別善悪所起経』をとりあげて、たま〳〵読み出しました。そうしたら別掲の①、大正大蔵経第十七巻五一九頁の下の段七行目、

伝遠疎通戒於太察　篤信守一戒於壅蔽
勇猛剛毅戒於暴乱　仁愛温良戒於不断
広心浩大戒於狐疑　沈清安舒戒於後時

①分別善悪所起経（大正一七、五一九下）

正。若人作悪得悪若*干罪。或入太山地獄中。或墮餓鬼中。或墮畜生中。設得作人。當作下賤貧窮。無所識知。亦復醜悪色。如人種苦得苦實。種甜得甜實。長實譬如種五穀。種稻得稻。種豆得豆。如人作善得善作悪得悪矣

傳遠疎通戒於太察　篤信守一戒於壅蔽
勇猛剛毅戒於暴亂　仁愛温良戒於不斷
廣心浩大戒於狐疑　沈清安舒戒於後時
刻削溢急戒於剽疾多人長辭戒於無實
賢者且守戒　行之有三善
見敬多求愚　壽盡受天身
住戒行已盡　*已慧制意行
行至必當至　悉斷所當受
從戒可滅痛　三世戒在上

人物之性可以贊天地之化師古曰贊明也治性之道必審己之所有餘而強其所不足師古曰強勉也音其兩反蓋聰明疏通者戒於大察寡聞少見者戒於雍蔽師古曰雍讀曰壅勇猛剛彊者戒於大暴仁愛温良者戒於無斷湛靜安舒者戒於後時師古曰湛讀曰沈廣心浩大者戒於遺忘必審己之所當戒而齊之以義然後中和之化應而巧僞之徒不敢比周而望進師古曰比頻寐反唯陛下戒所以崇聖德臣又聞室家之道脩則天下之理得故詩始國風師古曰關雎美后妃之德而為國風之首禮本冠婚師古曰禮記冠義曰冠者禮之始也婚義曰婚者禮之本也始乎國風原情性而明人倫也本

乎冠婚正基兆而防未然也福之興莫不本乎室家之道衰莫不始乎梱內師古曰梱與閫同謂門橛也音苦本反故聖王必愼妃后之際別適長之位師古曰適讀曰嫡其下並同禮之於內也卑不隃尊新不先故師古曰隃與踰同所以統人情而理陰氣也其尊適而卑庶也適子冠乎阼禮之用醴師古曰阼主階也醴甘酒也貴於衆酒衆子不得與列所以貴正體而明

と、こういうことばが書いてある。この『分別善悪所起経』は確かに安世高訳ということになっておりまして、内容は良いことをせよ、悪いことはするなという経典であることにはちがいない。そしてそのためにいろ〳〵な五戒十善ということを詳しくかかれてあります。ところがこの、今読みあげたところがどうも経典のことばにしてはおかしいということに気がつきまして、そして受業生といろ〳〵中国の古典を調べましたところが、②のところ、これは『漢書』なのです。これは中国の前漢の歴史書、この中に①とほゞ同じ文が出てきたんです。②の二行目から後の五行目まで、

蓋聰明疏通者戒於大察、寡聞少見者戒於雍蔽（師古曰雍読曰壅）、勇猛剛彊者戒於大暴、仁愛温良者戒於無断、湛静安舒者戒於後時（師古曰湛読沈）

こういうことが書いてあります。これはこの漢書の巻の八十一、列傳巻五十一、張衡という人の伝記の中に出てくるもので、張衡というのは、非常に家は貧しくおとうさんの自身は百姓をしておった。ところが張衡自身は優れておっておおいに勉強し、しかし金がありませんから今日のことでいえばアルバイトをしてお金を得て、そして勉強を続けておった。とくに詩経というものに詳しく、彼が詩経を講義するときには、人々皆んなアゴをはずさせるほど笑わせながら講義をしてまことに巧みであったと、こういうことがこの漢書の中に書いてございます。この漢書の中の文章はときの天子に対していろ〳〵な注意すべきこと、そういうことを上書した、その中の一句にこのことばが入っている。これをみまして一体この『漢書』の著者である班固という人は西暦一世紀頃の人で、安世高という人は二世紀の人で、これは安世高訳かどうかはっきり分りませんが、お経には後漢の安世高訳と書いてあるのでありますが、すると年代的にみますと『漢書』の方が古くて、『分別善悪所起経』はもちろん、そのあとのことでございまして、当然おそらくはこの漢書をみて、漢書の中の気に入ったものをここにつけ加え、そうしたことで経典の中にこうした中国の古典が入っているという例として、たま〳〵大学院の授業のとき見つかりまして、これはわたし、まあビックリいたしました。そうしますと、一体この『分別善所起経』はどういう経路をとって今日に伝わっていたかといいますと、一番古くは『出三蔵記集』の中にこの『分別善悪所起経』というのが出ておりますが、西晋のときの失訳、つまり翻訳者は分らんと、ちゃんと記録してある。ところがそののちの経録になりますと、これがだん〳〵と加えられてまいります。それから唐の代になりますと、『大唐内典録』という道宣のつくりました経典目録には、安世高訳百七十六部一九七巻という多数の安世高訳という経典がずらっと並べてありまして、その中にこの『分別善悪所起経』は入っており

ます。ということは、それより以前の経典目録には翻訳者は分らないと書いてあるにもかかわらず、のちの経典目録になるとそれが安世高訳となっています。宇井伯寿先生には『釈道安研究』というのがございまして、ここに釈道安の経の序文ですね、序文を沢山翻訳したものがございます。宇井伯寿先生は安世高が訳したにちがいない、と思われるものだけをこれを『釈道安研究』に翻訳されておられるのですが、じつはこうして経典目録には二百十三部三百二十巻、百七十六部百九十七巻というようなふうに書いてございまして、はなはだしいものには、「古今訳経図紀」という経録には、西晋の恵帝の代に竺法度訳となっています。なにに基いてそういうふうに法度へ突然、『分別善悪所起経』を翻訳したかはわたしは存知ません。経典目録にはそう書いてあるというしか方法がないのですが、その後の経典目録の模範的経録として、唐の智昇のあつめました『開元釈教録』には安世高訳として、これがまた『開元釈教録』の中に入っております。その故に、宗初の大蔵経以後、すべて真経として「分別善悪所起経」は収められています。私はこれは疑経だと思うのですが。というふうになりますと、ほんとうにいわゆる経典目録の中に、誰それ訳と書いてあるのが、どの程度信頼できるかどうか、そういうことでも疑問が生じるわけでございますが、そういうことを言いますと、結局林屋友次郎先生の二の舞いになりそうですね。わたしはこれ以上経典目録については何も申さない。またわたしは経典目録については、もう勉強すまいと決めました。おそらくあの林屋友次郎先生はもう最後になって「こんなもん、どうにもならんわい」とおっしゃったにちがいないと思うんですけれども、そういうことを考えてみましても、今申しましたたゞひとつの例として、安世高訳の『分別善悪所起経』をとりあげまして、そうして『出三蔵記集』あるいは、隋の時代の経録、唐の時代の経録それによってみな違う、しかもそれらは一体どういったかたちでそれを処理したか、当然に本来であればもとの原本に立ち戻って考えるのが普通なんですけれども、中国の場合は原本に戻る余地がないわけでございます。まったく捨てて顧ない、原本というものは翻訳して漢字になればそれが漢字になったものが正しいということでございますので、経典目録というものを研究してみてもムダである。ということをわたしは信じておりますが、いろ〳〵こうしたいわゆる漢語仏典というのについて考えさせられますことは、つまりこうした経典目録編纂者は、中国人が書いたものはダメだと、翻訳して漢字になったものが一番正しいのだと、こういう考え方でございますが、その翻訳されたというものが果してほんとうに翻訳されたものかどうか、そうしてまたそれはいろ〳〵な中国の古典やなにかから援助を求めてはいないだろうか、こう

いうことをじつはこれから考えてみる必要があるのではないか。わたしは今までのところ、たとえば、孔子の言葉とかを今年になってから『分別善悪所起経』の中で数ヶ所みつけました。これは明らかに、孔子の言葉、孟子の言葉といわれるものがお経の中に入っている。

そういうことを考えますと、じつは日本では仏教の研究というものは、これはまずインドの仏教、サンスクリット、あるいはパーリ語、あるいはチベッタン、そうしたものを研究しなければ仏教は研究できないと、この頃は各宗門大学において、そういう傾向が多うございます。何故そういうことになったか、ということを考えてみますと、明治二、三十年代、東京帝国大学、京都帝国大学、あるいはその他のいわゆる帝国大学において仏教を研究するのは、これは宗教とかち合うからダメだと、そういうものなら哲学の中で、インド哲学の中で勉強するべきであると、こういう考え方から東京帝国大学のインド哲学科、西洋哲学科、中国哲学科というものが置かれた。その頃は中国哲学とはいわず支那哲学といわれておったのですが、そういう考え方から、とにかくインドのもの、西洋のもの、とにかく外国のものが必要となってくる。という形で何んでもかんでも今日では京都の仏教系大学あたりでも、インド仏教・チベット仏教をやってる方がいかにも秀才であって、中国のことをやっておるのは頭が悪いということになっておるように思われるわけでございます。これはほんとうに日本の仏教、中国の仏教を研究するのであればご承知のように、漢字で書かれた仏典、漢語仏典というのが基礎になって、それは翻訳された、あるいは翻訳されていない、それは別個でございます。これは漢訳されている、漢字で表現された経典、漢語仏典というものを研究することに確かに一方のインドの経典、あるいはパーリ経典にはこうある、というひとつの参考にはなるけど、それと較べてインド・中国の漢文経典はどうだという議論は成り立たない。つまり中国人の仏教、あるいはそれに影響された日本の仏教というものは、漢語の仏典を通じて得られたひとつの学問、あるいは宗教がございまして、第一パーリ語にしても、あるいはチベッタンにしても漢語の仏典より相当年数の後、数百年あとで書かれたものが今多く、いわゆるサンスクリット経典、あるいはチベット経典といわれるものであって、じつは今日残されている漢文経典よりはズッーと時代が新しいものである。従ってそれは原始仏教・インド仏教の研究には当然それらの学問の研究をしなければいけないけれど、中国仏教、日本仏教の研究というものにはもっと〳〵いわゆる漢語の仏典の研究というもの、もっと深く考え、あらたな視野に立って、それを勉強していく必要があるのではないか、そういうことをわたしは最近とくに考えました。こちらの書籍部

で求めました『修証義』でございますが、そういうものを拝見いたしますと、日本人が日本人の頭で考えられたお経というもの、そういうものを真剣につくる。あるいは考える。そういったものを今、あらためて努力する必要があるんじゃあないでしょうか。つまり仏教というものはこれは学問ではございません。この頃はなんでもかんでも学という字がつきまして、禅学研究とか仏教学研究とか、浄土宗でありますと浄土宗学研究とかことばがございますが、本来の仏教というものは仏のおしえ、仏の宗教でございます。従ってその宗教としての観念を持たずに、たゞたんにこれはどうやあれはどうやといってみましても、本来の仏教という立場からもう一ぺん今の時代にふさわしい経典というようなもの、これをつくるべきではないか、わたしはこう考えます。つまり経典というものはご承知のように、これは漢訳仏典を読めば分りますように、「如是我聞……」つまり「わたくしはこのよう聞きました」ということで表現されている仏典というものは、もちろんお釈迦様の直説ではございません。弟子たちがそれを聞き、そしてそれを時代と共にあわせてそれがつくられていく、そしてインド仏教でも時代と共にそれが発展していく、そしてそれが中国の場合でも中国仏教の発展と関係なしに、つまりインドから坊さんが持ってきたいろ〳〵な時代にできた経典がおそらくは、ときの成立の前後とは考えることなしに、そしていろ〳〵な経典が翻訳される。そしてそれをもって自分の宗とする人たちはそこでわたしの持っているこの経典が正しいという、そうなると時々意見の合わないことがでてくる。こっちのお経ではこうなっている、そういう類に、教相判釈といわれるものが出てくる。つまり自分達のお経が正しい、それをもりたてていく、アッチからもコッチからも引っ張ってきて自分たちの都合のいいようにみな、立てる。それがいわゆる教相判釈といゝ、判教と言われる。それはその時代によって変化してくる。

ところが日本にまいりますと、祖師の言葉、宗祖の言葉というものは絶対金科玉条でありまして、もう絶対でございまして、これに一言一句私意を加えてはならないといい出すわけです。もとの教えそのものは決してお釈迦様が直接いわれたことばではありませんで、それは時代と共に次から次へつけ加えられて、そして新しい経典が生まれてきているもの、たとえば浄土宗には『浄土三部経』というものがございますが、『浄土三部経』などの考え方はお釈迦様が亡くなってから二百年も後になってから、浄土という考え方が発生したというふうにいわれております。そうしたかたちで新しい浄土というものが生まれる。それを同じようにいろんな時代を経て、当然人間の知識の変化とかそういう受け止め方の変化、そういうことを考えてみるときに、やはりわたしどもは今の

日本人のお経というものを考える必要があるのではないだろうか。今日おそらくはわたしども考えますと、日本で仏教は盛んだといわれますが、それじゃあ一番大事な仏典はどうかというと、それはワケの分らん難しい漢字ばかり並んでおって読んでも分らん、聞いてもいよ〳〵分らん、とにかくお経が始まったら、農村寺院の住職である私の短い生涯の間にも、昔はキセルをたたく、つまり煙草をすった、この頃はあんまり煙草を吸う人はないようですが、ま、第一、キセルはなくなりましたからそういう音は、お経を読んでいても耳に入らなくなりましたが、つまりそういうようなほんとうの今の時代にふさわしい経典というもの、つまりつくる必要があるのかないのか。そんなもの今の時代にお経でもあるまいし、いうのであれば、一体今の時代に、なんの為に難しいお経を読んでいなさるのか、これは各宗団共に真剣に考えるべき問題であるかと思います。中国の方でこうした疑経が数多く出ました。今の道安の疑経目録の中には中国仏教の初期時代でございますが、二六部三十巻の疑経があり、これが『開元釈教録』になりますと千何百巻という疑経が、しかも名前の分っているものは、ちゃんと名前があげられている。しかも時代に応じて多くの経典がつくられる。もちろんつくられた経典は、ときには時代に適わなくなってくるものでございます。たとえば先ほどの『血盆経』というものは、もう今の時代には許されない。また『善悪因果経』というようなお経がございます。これなど東京であれば山喜房とか仏書店へ行けば何部かが必ずおいてあります。そして売れていきます。いつも新しいお経本がおいてあります。そして京都では其中堂や東本願寺・西本願寺前の仏書店へ行きますとやはり置いてあって、そしてそれを在家の人たちが読んでます。読んでおるけどそれは『善悪因果経』みたいにですね、「善い事をしたら善い報いがある。おまえさんの顔の綺麗なのは前世で善い事をしたから、おまえさんの顔の醜いのは前世で悪いことをしたからその報いがきた」そういうようなお経は、今日の時代には申すことは許されません。例えば象の姿を目の不自由な人が見て、細いステッキのようなものだ、イヤ象は大きい大木のようなものだとか、あるいはみののようなものだとか、あの「群盲索象」のような、ああしたものも今日の時代には許されません。

それは経典というものが「時」と共に進んでいくという一つの証拠でもあるわけです。時代と共にいろ〳〵な教えというものがそれぞれ変わっていかなければいけない。ところが日本人はとにかく経典というものは祖師の掲げたものであって、一字一句不可加減、一字一句も増やしたり減したりしてはいけないという考え方によって、非常に経典というものを固定的なものにしてしまう。しかしそれが果して仏教として

の動きの中で、ほんとうにそうであってよいのかどうか、こういうようなことについても、いろ〳〵問題があるわけです。わたしはそうしたことでいろ〳〵な問題点を申しあげたわけでございますけれども、ひとつの経典をとりあげましてもこうした問題がある。おそらく『観無量寿経』というのは翻訳経典ではなく、漢語仏典として、あの九品の名をみても、再考を要するところです。

日本の浄土宗、あるいは真宗では『浄土三部経』として非常に尊ばれております経典でございます。ところが本願寺さんの方では『浄土三部経』は全部では法要の読誦には長すぎる。だからそれをはしょって、読誦用の『浄土三部経』というのを宗務庁の方でつくって末寺に配布している。アッチコッチを削っておりまして、『浄土三部経』の要所、要所はとってるけれど、本来の『浄土三部経』の二分の一か三分の一くらいの、これは中国人の経典目録編纂者のことばを借りると、「私の見解をもって経典を短かくするとか、抄出するといいまして、こんなものは偽疑の経である」というておるのですが、今の日本の真宗各派の読誦用というのは短かくしてある。時間的に手際よく一時間か二時間かの間に読めるという、そういうようなことをやっているけれども、こんなことは本来のお経のあり方ではないわけであって、短かいなら短かいでも、もっとそれ〴〵の宗派において今の時代に適し

い、読んで解り、聞いて解るというお経というものを真剣に考える必要があるのではないか。それ〴〵の宗派が多少の努力はしているのでしょうが、決定的にひとつの結果としてどういう翻訳がなされたか、和訳経典というようなもん、和訳経典と申しましても述べ書きではどうにもならんわけです。例えば『国訳一切経』というのが大東出版社から数多く出版されましたけれど、あれはまさに述べ書きしてあるだけであって、あれ読んでも決して本筋がわかるわけではございません。もっと読んでわかるお経というもの、そうしたものを真剣にやはり考えなければならない。そういうことを、わたしもこうした「疑経研究」という一つのジャンルを通して考え出したわけでございます。

この疑経ということばは、わたしは丁度昭和三十年頃、ロンドン大英博物館のスタインが蒐めました敦煌経の写真が東洋文庫に参りまして、それが十二・三万枚ございます。それがわたしのおりました京都大学の人文科学研究所へもちこまれまして、それをあげるから整理してやってくれ、そういうことでございまして、それで藤枝晃さんを班長とした研究班が設けられ、わたしども十数名が参加いたしまして、写真の一枚一枚を見まして、これはどういうお経か、『大正蔵経』に入っていれば、何巻か、何頁の何行め、というような作業を十年近く続けまして、一応それを終えたわけでございます

が、そういうことをやっている間に気がついたことは、スタインが蒐めました数多くの敦煌経、その中のよく読まれているのがあるのです。その読まれているのを写真でよく見ていきますと、これは決して『大般若経』とか『大智度論』のようなものではなく、身近な経典、そしてまた『法華経』もございますが、『法華経』の中にもまたよく読まれているのは『観音経』というようなもの、そうしたものが非常に多い。経典というものは、それを信ずる人が読むお経でございます。したがって信じる人達が読むために、わかり易いお経である。そうして敦煌経を整理しておりますと、この偽疑経類というものが数多く出てくるわけです。疑経類は、今日、宋版大蔵経以来の刊本大蔵経の中には入っていないんです。ところが実際のは整理してみますと、こういう『分別善悪所起経』という安世高訳となっているけれども、考えてみますとその中に、『漢書』の文句がほとんどそのまま入っているというようになってきますと、ほんとうにこうした経典というものを研究してみると、まだ〳〵じつはいろんな問題を含んでいるし、そういうものを通して、わたしたちは本当に今の時代に適しい経典というものを考えてみるに、これはそれ〴〵の宗学において当然必要なことと思われます。例えば大正大学と京都の仏教大学に、浄土学科というものがございます。これはおかしな話しで浄土学科とつけなければ、文部省の方でとおらん、とかガタ〳〵いうておるんですけれど、本当にそうしたものは宗教として仏のおしえとしてのお経であるという、考えに立つなら、やはり今の時代わたしたちが読んでわかる経典、そうしたものがなければならない。もちろん一方では仏教聖典というものがありまして、そして数多くの先人の苦労というものがございまして、それはやはりもっと今の時代に適しいことばで書かれたのでなければほんとうのお経とはいえない。

話しが別になりますが、わたし共、田舎の方に一つの神社がございまして、その神社の一つの行事として、「天王さん」という行事があるんです。その天王さんというのは何かといいますと、牛頭天王、その牛頭天王が毎年神社の氏子のところに降りる、そして降りると一切他の家で火の入ったものは喰べてはいけない、というひとつの儀式があって、「いったいその天王さんというのを知っるか」と村人に聞きますと「知らん」というのです。牛頭天王のいうのは、インドで仏教を守護するもの、ところが日本に入りますと例えば京都の祇園さん八坂神社という、あれも当然牛頭天王が祀ってある。日本の神さんとしては須佐之男命だけれど、そして祇園さんという名前自体からして祇樹給狐独園といわれるこれを頭と尾をとって祇園という、それが祇園さんとか天王さんというものが今現実に神社の中で生きている。それほどあるに

もかかわらず、肝心の本家、本元のお寺の方でお経というものをどのように考えているか、そういうことについてある人から言えば、「そんなものは仏教学のなかじゃない」とおっしゃるかも知れませんが、わたしはそれこそが仏教学宗学の一番大事なことではないか。そういうことについて真剣に各宗団において考えなければ、一番大事な一宗のおしえ、仏教のおしえというものについて多くの人は、ほとんどわけがわからんもの、というようなことで済ませるのでは、今日の仏教の生きていく道ではないだろうと思います。そういう点をわたしたちは真剣に考えてみる必要があると思われます。

こうした中で疑経というものについてどういう影響、日本におよぼした影響を考えてみますと、例えば『日本現善悪報霊異記』、『今昔物語』、『三国伝記』とかいわゆる日本の仏教文学、その中に数多く疑経がちゃんと引用されて、ひとつの読みものとして『今昔物語』などに入っております。そういうことを考えましても、この今の時代にやはりわたしたちは、仏教の漢語経典というものをもっと詳しくそれを知らなければならない。

わたしはそういうことで疑経というものについて、研究を積み重ねたわけでございまして、丁度一九七三年、二十年ほど前にフランスのパリの方へ少し勉強に行ったことがございます。パリの図書館の方に、ペリオの蒐めた敦煌経がありまして、このペリオはフランス人ですが非常に中国のことばに通じておって、敦煌の石室の中で自分の役に立つようなものを、ちゃんと選んで持って帰っている。スタインの方はあまりそういうことはなく、ザッと持って帰っている。ペリオの方は道教関係のものとか、中国仏教関係の珍しいものは全部、持って帰っている。そしてこれをパリの国立図書館に納める。そしてそれは綺麗に裏打ちもされて、いま図書館にございます。とりあえず毎日朝から『金剛経』を、きょうは何巻、明日は何巻というようにお願いして、図書館に行くと、ちゃんと出してくれる。その間ほとんど手が汚れない。ロンドンにあるものは、そのままになっておりますから、アッチコッチ汚れたままになっておりますから、手が真黒になる。ペリオ本の方は非常に綺麗になっている。国によってはそういう文献の保存のし方、方法が若干ちがいますが、そういう中でみておりましたら、次から次へ、いわゆる疑経というもの、すでに失くなっていると思われるもの、そして経録の中では全部排除されたもの、そうしたものが数多く発見され、またそれが非常によく読まれておる。中には手のあかですっかり黒くなっているお経が数多くある。そうしたことをみますと、これはおそらくは、やはり敦煌の方で読まれたものである。もちろん敦煌で発見されたお経は、多くはみな長安・洛陽など中原の地からもたらされたものでございます。従っ

ておそらくは敦煌の古写経というものを通じてその時分の唐の時代の中国の仏教を知る上で非常に役に立つ、そういうことを感じました。

僧伽和尚というのは、実在の西域の坊さんであって、唐の時代に今の安徽省泗州におった坊さんです、これは慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』の中には、船着場に行くと、乗っている船の水夫たちが山の上にある僧伽和尚堂にお詣りするということが書いてある。その『入唐求法巡礼行記』を英訳しましたライシャワーは「僧伽和尚堂」というのがどうも分らなかったようで、（多くの坊さんの相談するところ、協議するところ）とわざ〳〵翻訳して『入唐求法巡礼行記』訳本に書いてあるんですが、じつは僧伽和尚という実在の坊さんがおって、安徽省の泗州という、四つの川が集まったと書きまして泗州という所がありましてそこに、お寺を建て、そこに燈台のようなものを建て、水路を行く船の安全をはかった。そういうところから、日本でいう金毘羅さんの信仰のように各地方に僧伽和尚堂というものができまして、揚子江の上流、成都の方とか、あるいは南の方とか、北の方とか、至るところに僧伽和尚堂、というようなものが設けられ、和尚は「泗州大聖」ともいわれております。敦煌の写経の中に『僧伽和尚欲入涅槃説六度経』というお経がでてきたわけで、おそらくこれなんかはその時代に応じて僧伽和尚が死んだ頃に、こういうものがつくられ、それで現実にそれを読んでまたその中に説かれている経説とかまたお経とかおしえ、またその人達が読んで納得したんじゃあないかと思われますが、そうしたものがスタインの蒐めた中に数点みることができます。またペリオの蒐めた経典の中にはもっと数多くの疑経関係があり、これは時代と共に消えていくけれどもまた時代と共に新に生まれてくる。

そうした経典というもの、つまり経典というものについての考え方というものをもう一度別の見方で、お経というものはいつも、あとから、あとからつくられていくものがある。これは仏教の発展というもの、それと同じでございます。仏教のおしえ、根本のおしえ、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」というような根本のおしえはいつまでたっても変ることはございません。人間は生まれれば死ぬ。それと変わりはないのでございますけれど、おしえの導きの方向というものに当然のように、時代と共に変化があるのではないかと思うわけでございます。わたし自身そういうことを考えていきたく、それがきょうの、とくに漢語仏典ということばを用いましたのは、中国仏教というものについては、翻訳仏典もいわゆるお経、漢民族のつくったお経も同一に論ずるべきであるし、おそらくは天台大師、その他の祖師方は疑経を知ってか知らずかそうしたことはまったく、論外としてそれ

を使って、『観音義疏』、『法華義疏』、『摩訶止観』とかの中に、それを使っておられます。そうしたことを考えるにつけ、時代と共にそういうものが必要ではないかと考えます。

これは堅苦しい学術研究という立場ではございません。これは仏教という立場から皆さん方に、もう一ぺん経典というもの、そうしたことについて考えていただければと思いまして、遥々と京都からまかり出たわけでございます。

今日は、長時間お話しいたしまして失礼いたしました。この時間を与えられましたことを感謝いたします。